

Title	孤独感のAging Paradoxと対処方略に関する研究
Author(s)	豊島, 彩
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56031
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (豊島 彩)

論文題名

孤独感のAging Paradoxと対処方略に関する研究

論文内容の要旨

第一章 序論

高齢期は、親しい者との死別といった孤独感を高めるとされるライフイベントが多く経験されることから、加齢に伴い孤独感が高まることが予想される。しかし、高齢期に報告される孤独感の高さは、若い世代と比較して同程度、もしくはそれ以下とされ、本学位論文では、加齢に伴う社会関係の変化のネガティブな影響が、孤独感の変化として見られない現象を“孤独感のエイジングパラドクス”とし、その関連要因を検討することを目的とした。孤独感のエイジングパラドクスを説明する枠組みを提供する理論を概観した結果、加齢に伴う社会的ネットワークの縮小や社会的資源の制限に対し、高齢者は外的な資源の最適化（一次的制御方略）と内的知覚を調節すること（二次的制御方略）の2つの方略により対処していることが考えられた。本学位論文では、両方略が孤独感および主観的ウェルビーイングに及ぼす影響、特に二次的制御方略に注目し、検証することを目的として、以下に示す6つの研究を行った。

第二章 日本語版孤独感尺度の検討およびその年代差

本学位論文における中心的概念である孤独感を測定する心理尺度を検討し、国内における孤独感や主観的ウェルビーイングの年代差を検証することを目的とした。研究1では、UCLA孤独感尺度第3版の日本語版の検討を目的とし、高齢期群として高齢者大学に通う65歳以上の男女、青年期群として近畿圏の大学に通う大学生を対象に質問紙調査を行った。分析結果から、本尺度の日本語版の信頼性と妥当性が確認された。研究2では、中年期の対象を含めた別のサンプルを用いて、再現性の検証と年齢差について検討した。青年期群(29 - 31歳)、中年期群(49 - 51歳)、高齢期群(69 - 71歳)を対象としたインターネット調査のデータを分析した。分析の結果、高齢期群の孤独感尺度の得点は他の群よりも低いが、因子構造及び外的基準とした変数との相関関係に年代差は見られず、本尺度で測定する孤独感の概念が年代で異なるとは考えにくいことが示された。

第三章 一次的制御方略の効果の検討

孤独感のエイジングパラドクスについて、一次的制御方略を反映する指標として、孤独感との関連で加齢変化が見られるソーシャルサポートの効果、特に提供サポートに注目して検討することを目的とした。研究3では、研究1のデータを再分析し、ソーシャルサポートの受容と提供が孤独感を低減し、それにより主観的ウェルビーイングが高い状態に維持されるというモデルを多母集団同時分析により検証した。その結果、高齢期群にのみ手段的サポートの提供が孤独感と有意に関連することが分かった。よって、高齢期において手段的サポートを提供することは孤独感を低減させる有効な手段であることが示された。しかし、モデルに含まれる変数や従属変数によって結果が異なり、一貫した結果が得られなかった。研究4ではサポートの授受について高齢者がどのような評価をしているかを詳細に検証するため、老人福祉センターを利用する高齢者12名を対象とし、質的研究による検討を行った。インタビューで得られたエピソードを、提供サポートに積極的か消極的であるかでカテゴリーに分類した。その結果、提供サポートの消極的な評価に関するカテゴリーの内容から、高齢のため提供できる資源が限られ、高齢者が自身をサポート資源として見なしていないことが考えられた。研究3,4の結果から、提供サポートは心理・社会的にポジティブな効果が見込まれるが、提供できるサポート資源の制限や、自身が他者を支援することに抵抗を感じるという課題点が挙げられた。

第四章 二次的制御方略の効果の検討

二次的制御方略の効果を検討するにあたり、関連する指標として独自志向性を取り上げ、孤独感、及び主観的ウェルビーイングとの関連性を調べることを目的とした。研究5では、“孤独感を含めたモデルの場合、独自志向性は主観的ウェルビーイングとポジティブな関連が見られる”という仮説について、研究1のデータを再分析して検証した。階層的重回帰分析の結果、独自志向性の高さはネガティブ感情の低さと有意に関連し仮説は支持された。媒介分析の結果、高齢期群の方が青年期群よりも独自志向性が高いためネガティブ感情が低いこと明らかとなった。一方、独自志向性の高さとポジティブ感情との有意な関連性は見られず、独自志向性の高まりに示される二次的制御方略による対処は、ネガティブ感情を抑える機能に留まることが示唆された。

第五章 施設入居による社会関係の変化に対する適応過程

第五章では一次的制御方略だけでは対処が困難であるとされる者を対象として、ライフイベントに伴う社会関係の変化への、両方略の使用による適応過程を検討することを目的とした。研究6では盲養護老人福祉施設の入居者を対象として、施設入居に伴う社会関係の変化にどの様に対応していたのかを質的研究により検討した。施設の入居者19名を対象にインタビューを行い、施設入居前・入居後・適応期（慣れたと感じた頃）・現在の各時点で施設生活について感じたこと、施設内での人間関係、家族や施設外の人間関係について尋ねた。得られたデータをナラティブアプローチにより分析した結果、施設生活に適応しているとされた利用者は、入居後の環境の変化に対して、外的資源の働きかけ（一次的制御方略）から内的知覚への働きかけ（二次的制御方略）の使用へと単純に移行するのではなく、両方略を使い分け対処することが分かった。研究6の結果から、周囲との関係が築けることで、一人で過ごす時間においても他者との関係性を感じることができ孤独を感じないといった、両方略が相互的に関係し施設生活に適応することが考えられた。

第六章 総合論議

本学位論文の結果から、現在の日本においても、孤独感のエイジングパラドクスが確認され(第二章)、高齢者は他者をサポートすることで社会的活動を維持するといった一次的制御方略による対処(第三章)と、独自志向性の高まりに示される二次的制御方略による対処(第四章)により、加齢に伴う社会関係の変化に適応し、主観的ウェルビーイングが維持されることが示された。また、高齢の視覚障がい者といった、社会的資源が顕著に制限されると考えられる者は、施設入居に伴う社会関係の変化に、両方略を使い分けて対処していることが示され、両方略の相互的な関連が考えられた(第六章)。課題点として、孤立状態や社会接触頻度といった客観的指標との関連が検討されていないこと、研究6の視覚障がい者を対象とした質的研究の結果の応用可能性の限界が挙げられた。今後、上記の課題に対して縦断研究による因果関係の整理や、年齢と障がいの影響を考慮した検討を行うことで、本学位論文で示された、加齢により社会的活動が制限されても孤独感が高まらずに生活できる状態をより精緻に検討することができる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (豊 島 彩)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	教 授 佐 藤 眞 一
	副 査	教 授 篠 原 一 光
	副 査	准教授 権 藤 恭 之

論文審査の結果の要旨

社会の超高齢化に伴い、未婚、離別、死別等の結果、社会的に孤立する高齢者、他者との関係性の問題から深い孤独感から逃れられない高齢者が存在する。しかしながら、一般に高齢者は若年者に比べると幸福感が高く、社交性にも優れていることがわかっている。エイジングパラドクスと呼ばれるこうした事実は、社会的孤立の改善や心理的孤独感を制御する機能が高齢者に存在することを予想させる。

本学位論文では、加齢に伴う社会関係の変化のネガティブな影響が、孤独感の変化として見られない現象を“孤独感のエイジングパラドクス”と規定し、その関連要因を検討することを目的として行われた。まず、加齢に伴う社会的ネットワークの縮小や社会的資源の制限に対し、高齢者は外的な資源の最適化（一次的制御方略）と内的知覚を調節すること（二次的制御方略）の2つの方略により対処していると捉えるHeckhausenら(1993)の理論の有用性を論じた。そして、両方略が孤独感および主観的ウェルビーイングに及ぼす影響、特に二次的制御方略に注目し検証することを目的として、以下に示す6つの研究が行われた。

研究1では、UCLA孤独感尺度第3版の日本語版の検討を目的として、高齢者および若年者に対して質問紙調査を行い、その結果、日本語版の妥当性と信頼性が確認された。日本語版作成に関しては、原著者であるアイオワ州立大学Daniel Russell教授の許可を得た後、Russell教授の元への留学を経て、共同研究へと発展している。

研究2では、再現性の検証と年齢差を検討するために、青年期群、中年期群、高齢期群の男女各群500名を対象とするインターネット調査のデータが分析された。その結果、高齢期群の孤独感尺度の得点は他の群よりも低い、本尺度で測定する孤独感の概念が年代で異なることが明らかとなった。

研究3は、孤独感のエイジングパラドクスについて、一次的制御方略を反映する指標として孤独感との関連で加齢変化が見られるソーシャルサポートの効果、特に提供サポートに注目して検討することを目的として行われた。その結果、高齢期群にのみ手段的サポートの提供が孤独感と有意に関連することが分かり、高齢期において手段的サポートを提供することは孤独感を低減させる有効な手段であることが示された。

研究4では、サポートの授受について高齢者がどのような評価をしているかを詳細に検証するため、老人福祉センターを利用する高齢者12名を対象として質的研究による検討が行われた。

研究5は、二次的制御方略の効果を検証するために“孤独感を含めたモデルの場合、独自志向性は主観的ウェルビーイングとポジティブな関連が見られる”という仮説について検証し、独自志向性の高まりに示される二次的制御方略による対処は、ネガティブ感情を抑える機能に留まることが示唆された。

研究6は、加齢に伴う認知資源の減少の影響を推定するために、極端に外的情報の制限される視覚障がいを持つ高齢者を対象に面接調査が行われ、周囲との人間関係を築くことで、一人で過ごす時間でも他者との関係性を感じることができ、孤独を感じないなど、両方略が相互的に関係し施設生活に適応することが指摘された。

高齢者の孤独感の制御方略を検討するという極めてオリジナリティの高い研究課題について、量的、質的の両面から迫った研究として高く評価することができることから、本論文は博士（人間科学）の学位授与に値すると判定した。